
月の晩に

木瀬三月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の晩に

【Nコード】

N8077H

【作者名】

木瀬三月

【あらすじ】

怪盗アゲハ―宝石だけをねらう怪盗―月光の下あなたの悪魔の心をいただきますにまいります。

怪盗アゲハ

月光の下、暗い部屋の中で1人の男のもとに小さな小包がといた。男が小包を開けると中から小さな風船が浮かんできた。

パンツ

風船は男の顔付近で割れ、なかから一枚の紙が舞った。男はその紙を拾い目を見開いた。

「かつ怪盗アゲハだど！？！？直ぐに警察を呼ぶんだ。」

予告状

今夜、夜10時に悪魔の心【プリンセス】をいただきに参ります。

怪盗アゲハ

ウーウーウー

数分後、パトカーのサイレンとともに、沢山の警官が斎藤の家へと到着した。

「怪盗アゲハ対策部の結城 南です。斎藤 高志さんですね？」

「ああそうだ。プリンセスだけは誰にもやれん！！絶対に護りぬけ！！いいな！！！」

それだけ言うと斎藤はドスドスと足音を立てながらどこか違う部屋へと消えていった。

南はショーケースに入れられているプリンセスと言われている宝石のちりばめられた鏡を見た後、視線を時計へと移した。

10時まであと5分。・・・3分・・・1分・・・10秒・・・
5・4・3・2・1・0

ジリリリリ

時計が10時ジャストになると電気が消え、警報がなりだした。

「でたぞ！！アゲハだ！！捕まえろー！！！！」

耳をふさぎなくなるような音とともに警官の大声が響く。

「こんばんわ。南警部！！」

少女の声に上を向くと天井近くの窓に髪の毛の長い女の影が見える。

「出たなアゲハ！！今日こそ捕まえてやるから覚悟しとけよ！！」

「やれるものならやってみなさい。」

その声が合図だったかのようになどどこからか煙が立ちこめあつという間に視界は真っ白となった。

「チツ！！窓を開けろ！！煙を外に出すんだ！！」

その声とともに周りの警官が窓を開け始めた。

煙が薄くなりあたりが見え始め、護っていたはずのショーケースの

なからからプリンセスは忽然と消えていた。

「今宵も悪魔の心いただきっ！あなたには、その宝石が似合うわ！もう一度、考えてみなさい！！」

その言葉と1つの宝石を残して、アゲハは暗い闇へと消えていった。南は、残った宝石を拾うと自分のポケットへと突っ込みそこを後にした。

「知ってるか？？昨日また怪盗アゲハが出たってよ！今回はプリンセスっていう宝石らしいぞ！！」

ドキッ

「アゲハって高校生くらいの女の子ってはないだよ？いがいにコノ高校にいたりしてな！！」

ギクッ

こんにちわ。私、佐野 真木。現在16歳！！女子高生。そんな私にも秘密がコノ秘密は誰にもいえない私のトップシークレット。それは私が怪盗アゲハってこと。今も教室でアゲハの話題のなかドキドキバクバク。しかも、運の悪いことにコノ教室にはあの結城南くんがいたりして。

ん？なんで警部が学校にいたって？？実は結城南ってチョー頭が良くて外国で飛び級してすでに、大学までの課程が終わって日本で警察してるんだけど。暇だからって高校かよってんだよね…怪盗やつてるこつちのみにもなれよ！！っていったって怪盗してるのなんか私ぐらいけど…

「結城〱お前何見つめてるんだ??」

結城という単語に私はビクツとした。

「ああ。これ？これは怪盗アゲハが置いてった物なんだけど…お前なんていう宝石かわかる??」

「そんなの知るかよ〱それよりお前！！美女とうわさされる怪盗アゲハからもらいものなんてずるいぞ！！俺にも触らせろ！！」

「だれももらったとはいってない！！現場に置いてあったのを勝手に持ってきただけだ。」

「結城〱それさらに悪いぜ？」

「まーき！！聞いてんの??また、結城のこと見てたの??」

「ちーがーう！！毎回毎回変なこと言わないでよ！！ただアゲハのことが気になったただだから！！」

彼女は私の親友の明田 薫。

「そんなにアゲハのこと知りたいの??」

「いや、そういうわけじゃないけど…その石の意味が気になるって言うかー……」

って本当は知ってるんだけどね。置いたの私だし、いつも気づいてくれる結城くんになんと託してるんだけど…今回は難しかったかな？？ルチルレイテッドクォーツ——家庭の平和——

「明田くお前の家ってこういう宝石扱ってたよな？コノ宝石なんだから分かるか？？」

そうそう！！ようやく気づいたか…推定十回。すべて自分の力で調べたもんな…。

「ちよつと見せて…ルチルレイテッドクォーツかな…」

さっすが薫ちゃん。私も石の知識って薫ちゃんちに小さいころからいって覚えてたんだよね…それとお母さんがよく話してたし。

「意味は？」

「家庭の平和だよ。」

「家庭の平和か…そういえば！！」

結城はなにかに思い至ったらしく携帯をとりだしどこかへ電話をかけ始めた。

「俺だ！！聞きたいことがあるんだが？…ああ！！やっぱりな。」

反応からすると、斎藤の秘密が分かったらしい…私は事件が解決し
そうでホッと息を吐いた。

「明田。ありがとな！おかげでなんで怪盗がでたのか分かったよ」

斎藤は、家庭内暴力をしていた。もちろんそれまではみんなを大切に
する人だったんだろうが…悪魔に取り付かれ斎藤は変わってしまった。
った。

「いえいえ～お安い御用で！！」

結城くんはふと私を見たがすぐに視線をずらし教室から消えていっ
た。

「真木～今日もご飯食べに来る??」

「あっうん。行く～」

私は毎日夕飯を薫の家で食べている。私には両親がいなく、今一人
暮らしをしているからお隣の薫のお母さんが気を使って毎日呼んで
くれるのだ。私は父親に捨てられた。私が小学校6年生のころ母親
が死に、父親は私の能力を嫌い、私を化け物とよび、ついには私の
前からいなくなった。私は超能力というものが使える。体を浮かせた
り物を動かす能力があるのだ。怪盗をするにはコノ力は便利！！み
んなマジックだと思ってるしね。

私が怪盗を始めたのは2ヶ月前…そのとき私は古い小さな雑貨屋
で不思議な箱を見つけた。なぜか欲しくなって思わず買ってしまった
たのがことのはじまりである。

私はその箱を家に持ち帰り自分の部屋へ着くと開けてみた。中に
は色とりどりの石が入っていた。

「うわーキレー・・・！！って、ん？これなんだ？」

私が見つけたのは小さな紙。その紙には『この石はあなたの願いをかなえます。紙に自分の名前を書いてお祈りください。』なんて胡散臭いことが書いてあった。

そんなわけないじゃん。でもどうせならやつちやえってことで私は紙の模様のところの下に自分の名前を書き込んだ。すると、いきなり箱が光りだしてあつという間に箱の中は空っぽに…私がほうけているとさらに箱が光りだして、私の目の前に小さな生き物が現れた。

「お前が封印をといたのか？？なんてことしてんだ！！ばかやろー！！これは大事な封印だったんだぞっお前のせいでみんな不幸な目に会ったかもしれないんだ。第一こんな胡散臭いことするなよ！！」

キヤー――

私はあわててそこら辺の新聞紙を丸めてその物体へと投げた。運悪くそいつにヒットし、私はひらひらと落ちていく物体をまじまじと見つめた。これは…人？？それとも妖精とかいうもの？？もしかして夢見てる？私は自分の頬をつまみ力を込めてみた。

「いたっ！！やっぱり夢じゃないよね…とりあえずこのままじゃまづいかも…さすがに人殺しにはなりたくないし…」

そうおもって、とりあえず私の布団に寝かせること数分後、そいつはようやく目を覚ました。

「いたたた。お前えなんてことするんだ！！痛かったじゃないか！！」

「あんたが驚かすから悪いんでしょ！！第一あんた何者よ！！」

「おお忘れてた。俺はアレス。コノ箱の守護者だ。」

「ふーん。で？」

「お前が封印されてた悪魔を逃がしたから俺がこの世にこなきやになっただ。まったく任務が終わるまで天界には帰れないし…最悪だ。」

「あの石が悪魔？？てか天界って？？」

「まあ・・・詳しく言うちょっと違うがあの石に悪魔が宿っていて人間に取り付くんだ。悪の道へと…・・・天界は俺たち天使が住んでいるところ。神様の下にいるのが12人の天使長俺はその下のただの天使。」

「そんなところ本当にあるんだ…。で？悪魔に取り付かれるとどうなるの？？」

「盗みをしたり、不正をしたり、狂って殺人をしたり、まあ人間界で言う悪いことをするんだ。」

「それって下手したら人がしんじやうってこと？？」

「そついうことだ。」

「それってまずいじゃん!!どうすんの??」

「そのために俺がいるんだ。」

「じゃあ早く何とかしなさいよ!!」

「俺だけじゃだめなんだ。封印をといたお前の力が必要なんだ。」

「役に立たないわね…でも私が間接的であつても人を殺すっていうのは気分が悪いからその契約のつてあげるわ。」

「そうか。よかったよかった。」

「で?どうすればいいの??」

「その石を集めるんだ。そしてコノ箱に戻す!!」

「どうやって??取り付いちゃうんでしょ??そんなの分かるわけないじゃない…」

「これを使つんだ!!取り出したのは指輪…」

「これに、お前がk i s sすると別人に変わるから、それで石を盗む…」

「てっ私が泥棒しなきゃいけないの?!?!」

「だって取り付かれてるやつは絶対に素直に渡すわけないし、なら盗んだほうが早いだろ??」

「まあそついわれればそうなんだけど……はあ……しょうがない約束しちゃったしやるとしますか!!」

「おう頼んだぜ相棒!!」

というわけで、私はアレスと一緒に石集めが始まった。

「ただいまー」

「お帰りー」

今では家に帰ると一人の男の子が出迎えるというのが普通になっている。実はアレス人間になることができたんだよね……だから私が学校にいる間。家で、家事をしている。

「真木、次のターゲット決まったぜ!!次は加藤 孝雄がもっている。【白鳥の調】だ。」

「その加藤って人は何をしてたの?」

「ああ裏取引をしてたらしい。」

「なるほどね……じゃあ予告状だしますか!!」

予告状

加藤 孝雄様

明日夜、11時にあなたの悪魔の心【白鳥の調】をいただきに参ります。

怪盗ア

ゲハ

次の日の夜。一つの影が木の上に揺らめいていた。

「よし！！時間通りね。さあ今夜もとりに行くわよ」

私が指輪にkissすると黒かった髪が、金色に変わり服装は黒いミニスカートへと変わった。瞳は黒からブルーに、もともと顔立ちはいいたためまるでフランス人形のようになる。

「じゃあ行くわよアレス！！」

アレスは小さくなり私の後をついてきた。

私は警備の厳しい中、自分の体を浮かせ二階窓の、バルコニーへと着地した。

11時まで後10秒・・・5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・0！！！！

11時ジャストになったと同時に窓を叩き割った。

「こんばんわ皆さん。今宵も悪魔の心いただきに参りましたわ。」

パチンッ

指を鳴らすと同時にもってきていたロープを力をつかって浮かせ証明を落とした。

暗闇の中、二階から飛び降り、素直な心のショーケースを割った。私は白鳥の調をしまうと、向きを変え警官の間を縫うようにして走り出した。

あと少しで出口というところで、誰かに手をつかまれた。

ガシッ

「逃がさないぞ怪盗アゲハ！！お前は俺が捕まえる。」

手をつかんでいたのは結城南だった。

「あら、南警部こんばんわ！！その手離していただけますか？？」

「そんなことするわけないだろ？？それよりもこの間の石——お前は斎藤の家の内情を知っていたのか？？どうやって知った？？知っていたならなぜ警察に言わずに自分でやろうとするんだ！！」

「そんなの企業秘密に決まってるじゃない！！私はこの宝石たちが必要なの……いつも石の意味を考えて事件を解決してくれてるあなたに感謝するわ……」

「それじゃあね！！see you again！！」

私は少し力を使い南を後ろへ押し、その手が離れるとそのまま、自分の体を持ち上げ二階のギャラリーへと着地した。

「怪盗アゲハ！お前の予告状。俺のところにも出せ！！お前は絶対俺が捕まえてみせる！！」

「私があなたの居場所がわからなかったらどうするの??」

「そんなこといつて知ってるんだろ??これは俺とお前の勝負だ！！」

「わかったわ。望みどおり、届けてあげる。それじゃあね警部さん。」

その日素直なところと一緒に置いたのはガンゴーム——規律と守護——

「あんなこといつてよかったのか??」

家に着くとアレスはちよつと心配そうな顔で聞いてきた。

「だって真剣なんだもん…それに最後つかまるならあいつがいいと思っただのよ！」

「だからどうしてお前は最後自分が捕まらなきゃいけないって思ってるんだ!?!?!?」

「悪いことをしてるからそれは当然のことでしょ??」

「私だけつかまらないなんて卑怯以外の何者でもないわ！！それに、なんかあいつが気になるのよ。なんであんなに必死なのかとかね…」

「まあ、お前の正体がばれないようにやってくれよ??」

「わかってるわ！！それに最後まで集めたら願い事かなえてくれるんでしょ??」

「ああ。それは約束だからな！！神様もそういつてるし…」

「じゃあがんばるとしますか！！」

いつも以上に疲れた私は直ぐに布団へと横になり、夢の中へと沈んでいった。

秘密の会談

「やばい！！！遅刻だぁぁ！！！」

叫びながら起きた時間は8時20分！！学校が始まるのが、8時30分！！真木は後10分しかないなかで、着替えを済ませ、顔を洗い、パンを食べて出発した。

「いつてきまーす！」

「おう！！いつてらっしゃい。」

こんな日常に慣れたのか、アレスは動揺することもなく、一人お茶を飲み始めた。アレスが家でのんびりとしているなか、真木は学校まで全力疾走していた。息が切れ、動機が激しくなってきたときようやく目的地が見え始める。目的地が見え始め、真木がスピードを上げたときだ。

ドンッ

何かにぶつかり真木はしりもちをついた。

「いたたたた…」

「悪い！！大丈夫か??」

真木に手を差し伸べず人を見て真木は目を見開いた。

そこにいたのは結城南だった。

「結城くん!!??」

「えっ?そうだけど…」

結城は見てわかんないのか?とも言うように私を見ていた。

「えっあ!!ごめんねぶつかっちゃって…」

「おかげで、完璧遅刻だ。」

そついわれ、ハッと息を呑む。

「忘れてたわけ?」

しょうがないじゃない!!目の前に敵がいればそんなことすっかり忘れるわよ!!私は追われる身なんだからっ!!

と心のなかで叫びながらこくんとうなずいた。

「しょうがない…一時間目はサボるか…」

「へえ!結城くんでもサボることってあるんだね…」

「俺だってさぼるさ!!どうせ聞いても意味ないしな…」

「まあそうだよね…結城くん努力してそうだし」

私の言葉に結城が驚いた顔をした。

「えっ！！？なんか変なこと言った？？」

「いついやら…なんでもない」

結城はすばやく表情を戻すと歩き出した。私がどうしようか迷っているとは結城が手招きをしたので付いていくことにした。

結城は裏庭にいくとベンチに腰を下ろした。私はベンチには座らないで結城さんに質問をした。

「ねえ？結城くんって警察なんでしょ？？どうして警察と高校両方はいったの??」

私は、ずっと気になってたことを聞いてみた。

「そんなこと知ってどうするんだ??」

結城くんは少し怒気を含んだ声で聞かれ私は理由なんて思い浮かばなかった。

「わかんない…聞きたかったの」

結城くんの怒ってる顔を見たくなくて私はうつむいた。

「プツ…アハハハハ！！そんな正直に答える人始めてみたよっつっ」

「そっそんな笑わなくなつて！！だって取り繕ってもしようがないじゃない!!」

「悪い悪い！！俺の周りには興味でしかなくせにへんな理由をつけて聞いてくるやつばかりだから新鮮で……！！」

「そんなやつ、友達になんかしちゃだめだよ？？結城くんがづらい思いするだけだから。」

「ありがとな。で？？なんだっけ？？警察と高校を両方入った理由だっけ??」

私は肯定の意味を示すために頭を縦に振った。

「そうだな…高校はただ暇だったからなんだけど…警察は親父が警察官だったんだ。つねに『自分のできることを精一杯やればいい！それでもできなかつたら何度でも挑戦し続けるっ！』って言うってた。俺は親父の意思をついで警察になったんだ。これは、死に目に会えなかった俺なりの償いなんだ。でも、義務感だけで警察をやってるわけじゃない！！俺は、困ってる人を救いたいと思うし、自分の力が役に立つのがうれしい。だから警察をやってるんだ。……ってなんか語っちゃってごめん？」

私は手に力をこめて両親のことをはなす結城くんがうらやましいと思った。私にはない父親との思い出。

「いい。お父さんだね…あーあ！！私もお父さんって呼んでみたかったな……」

「お前、父親いないのか??……って悪い！！言いたくなきゃ言わなくていいんだ。」

私は首を横に振りながら答えた。

「いいの。結城くんは話したのに私が何も言わないんじゃないやフェアじゃないからね…私の父親は死んだわけじゃないけど、抱きしめてくれるわけでもない…私が小さいころに父親はお母さんに暴力をふるっていたの…お母さんはいつも泣いていた。でも、どんなに父親にたたかれても、私を抱きしめてくれていたの。ある日お母さんは死んで、私は必然的に父親に引き取られた…でも、私は食べるものも与えてもらえず、ただ水を飲んで暮らしてた。そんなある日、父親は私を車に乗せこのまちにやってきたの。父親は言ったわ。『そこから動くな』ってだから私はその場所から3日間動かずにいた…けど、父親が来ることはなく、いつのまにか私は病院のベッドに寝ていたの。気づいたときには父親が私を置いて1週間たっていたわ。だから父親はいるけどいないの。」

私が超能力のことはぬかして話し終えた後、結城くんは私を見つめていた。私は結城くんに笑って見せた。もうそんなの関係ないのよって。結城くんは唐突に口を開いた。

「お前今、幸せか??」

幸せ??…うん、そうかもしれない。今の私には友達がいってアレスがいてライバルがいって…幸せかもしれない。

「幸せだよ。友達がいって、仲間がいって、ライバルがいるから」

私は自然と笑みを漏らした。結城くんは私が笑うのを見て笑った。

「よかったな!!どうせなら俺とも友達にならないか??俺の友達達第一号に君を推薦したいんだが??」

「クスクス…しゃべり方変わってるし！！でもありがとう。これからヨロシクね？」

「それじゃあ、一時間目も終わるころだし、教室へいきますか！！」

私たちは肩を並べて歩き出した。でも、私は結城くんの中で謝罪した。

ごめんね。本当はあなたのてきな…このことを知ったときあなたは私を軽蔑するかしら？？それとも怒る？？今だけ、すべての悪魔をつかまえたら、あなたにつかまるからそれまで、友達でいさせてくれる???

予告状と超能力

3時間目の途中で、頭の中に声が響いた。これはアレスの能力であるテレパシーというやつ。電話いらずですごく便利!!

『真木!! 見つけたぞ悪魔!!』

『ok!! 次は何を狙うの??』

『【黒の栄光】小さなリングだ。持ち主は川野透子。ちゃんと予告状出しとけよ?? 日時は今日の夜10時だ。』

『わかった。そっちの予告状は任せたよ??』

『分かってるって!!』

アレスの声が聞こえなくなり私は予告状を書き始めた。

昼休みになり、結城は友達と机を並べ始めた。結城が弁当を開くとポンツと音がしたかと思うと、沢山の紙ふぶきとともに小さな紙が舞い落ちてきた。結城はそれを手にとり、ニヤリと楽しみが増えたとも言つように笑った。

「怪盗アゲハからの予告状!!??」

一緒にいた男子があわてだす。

「なんでお前に予告状が来るんだ??」

「俺がたのんだんだ。怪盗アゲハに…勝負するならフェアじゃないとな!!」

「お前えええ。ずるいぞ!!俺にもその予告状をさわらせやがれ!!」

「イヤだね!!これは俺に来たのであって、お前らのじゃない。」

そういつて結城は予告状をポケットにしまった。

予告状

結城 南 警部殿

今宵、夜10時に悪魔の心【黒の栄光】をいただきに川野 透子様のもとへ参ります。

今宵はピンク・パールをお届けに参りますからぜひ宴へご主席くださいね。

怪

盗アゲハ

その夜、双眼鏡から黒の栄光をのぞく影があった。

「あれが黒の栄光ね！！」

「注意することは一つ！あのリングの周りには超高性能の感知機が仕掛けられていて、それに触れるとあつという間に上から牢屋が降ってくる。だから半径１メートル以内には近づいちゃだめだ。」

「わかったわ！！任せなさい！！」

私は指輪にkissを落とす。怪盗アゲハに変身したわたしは、ふわつと飛び上がり屋上へ着地した。

そのまま中へ入ると、窓際に沢山の警官が集められていた。

ここから私があるとってんのか？毎回同じ手で来ると思ったたら大間違いよ！！それじゃあ今回は警官にでもなりますか！！アゲハが隠れている近くを通った警官に後ろから手刀をいっぱつ食らわせ、気絶させ警官の制服を剥ぎ取ると、ロープでぐるぐる巻きにしてすみに寝かせた。

「よし、これでいいわね！！さあ宴の始まりよ！！」

そのまま、黒の栄光がある部屋まで行くと何食わぬ顔で黒の栄光のそばへたつた。

10時まで後3分・・・1分・・・20秒・・・5・・・2・・・1・・・0

パリーン！！

時間と同時に窓ガラスが割れる。もちろんこれは陽動！！力を使つて医師を動かし窓をわっただけだね！！皆がそちらへ目を奪われているうちに、さつと力を使つてショーケースを割る。ショーケースが割れた音で全員がこちらをむくがここで電気が消える。これはアレスのしわざ！！ナイスタイミングよアレス！！そのまま力を使つて黒の栄光を手におさめると、代わりのピンク・パールをおき、最初に割つた窓から飛び出す。

「今宵も悪魔の心いただき！！川野 透子！彼氏の心に気づきなさい！！それじゃあ警官の皆さん sea
you again！！」

窓の外には誰もいなく私は地面へと着地した。が！！

ドサツバサツ

着地した地面が落ちたと同時にふたをするように上から網が落ちてきた。

「つてなによこれ！！落とし穴つて…こんなことするのは南警部ねつご丁寧に蓋まで…。」

「正解だよ。怪盗アゲハ…これで君もかねんするしかないだろ？逃げ場はない！！それに回りは警官だけだ。」

「そうね…さすがの私でもこれは逃げられないわね……………
・なんていうとも思つたかしら…。」

私は網を抑えてた警官を力を使ってふつとばすと、網をとり地上へ飛び上がる。

「そこからでたからといって何が変わるんだ？俺はいったはずだ！この周りには警官が沢山いるとなー！」

「そうね・・・でも逃げ場はあるわー！」

わたしはそのまま空中へ浮かび上がると近くにあった木の枝に着地した。警官たちがざわざわと騒ぎ出した。

「それでは皆さんさようならー！」

これでわたしの力は完全にはれたわね！まあばれたほうが仕事しやすいって言うのはあるけど・・・でも普通の人間でいたかったな・

セーフォーアウト？

次の日の学校は憂鬱だった。でも、私にはやらなきゃならないことがある！！絶対怪盗アゲハが私だってことはばれないようにしなきゃ…。

「「はあ」「」

同時に二つのため息が重なった。

「お前らどうしたんだよ。二人してため息ついちゃってさ」

結城君とよく一緒にいる田戸枝 良くんが少し心配そうにしているのが見えた。

「そうよ。だいたい今日一日変よ？特に真木！！」

「え？？私変だった？？」

同時に目の前の二人がうなずく。

「先生に当てられても気づいてなかったし」

「どっかの誰かさんばかり見てたもんな！！」

田戸枝くんはニヤリと笑った。

「きつ気のせいだから。」

「へえ〜なんでそんなにあせってるのかなあ??ちよつと事情きかせてよ!」

ずるずると二人に引きづられて行かれそうになったが突然反対の手を引っ張られ私の体は止まった。

ん?

つかまれてる手の先を見ると結城くんの姿があった。

そのまま結城くんは無言で私の手をグイッと引っ張ると歩き始める。

「ちよつ・・・結城くん!?!?」

ガチャ

たどり着いたのは屋上でドアを開けたとたん風が私の髪を揺らした。まぶしい光が私の視界を覆い私の心に陰があふれる。

もしかしてばれた?どうしよ・・・でも、私と怪盗アゲハの共通点はないはず…。だっ大丈夫まだばれてない!!

自分に言い聞かせ結城くんを見るとジーと私を見ていた。

「どっとうしたの突然??ビックリしちゃったよ」

自分でもわかるくらい動揺しながらも笑顔を作った。

「佐野…お前は・・・」

超能力を信じるか？」

一瞬の沈黙があたりを覆う。

はあ

なんだそれで結城くん変だったのか…よかった。

「ん…信じるかな？別にそれがあつたてなくつたてその人自身に代わりはないから。」

「そうだよな…そうだ！！ありがとな真木！！」

え！？！？い…今、「真木って呼んだあ…！！！？！？」

」

突然ドアから薫と田戸枝くんがなだれ込んできた。

「お前ら！！聞いてたのか！！」

少し目を丸くして結城君は驚いた後一気に顔を赤くした。

へー結城くんでもそんな顔するんだ…。頭がよくて、スポーツができて何でも知ってるけどやっぱり同じ年なんだな。こういうところは

少年って感じ!!

「薫、何してたのかな?そこで・・・」

私が微笑むと薫が後ずさる。

「え・・・と。ぬすみ聴き?」

「ふふ。制裁が必要なようね。覚悟!!」

「ギャハハハッ」

私は薫の脇を思いつきりくすぐった。田戸枝くんも結城くんも自分だったらと想像しているのだろうか。青ざめていた。

「ハアハアハア。」

ようやく制裁も終了し、ぱっと手を離してやると薫は自分の息を整え始めた。

「それじゃあ薫。もうこんな時間だし行こうか?」

「うん。わかりました。。。」

テンションの低い薫を促し立ち上がらせると二人を見た。

「それじゃあね田戸枝くん。結城くん。」

私が手を振り歩き出すと後ろから声が聞こえた。

「南でいいから――！俺も真木って呼ぶし――！」

私は自分の頬が緩むのがわかった。純粹に名前と呼ばれるのがうれしかった。自分だけの特別な名前を呼ばれることが。

「ありがとう――！南くん。」

「おう。じゃあな――！」

夕焼けが浮かぶ空を見上げてもう一度笑った。

とりあえず今日はセーフかな？

空の華

7月16日。今日は夏祭り！！薫と花火を見に行く約束をしていた私はウキウキと踊るように準備していた。

「買ったちゃった・・・」

手にはピンクと白の浴衣がある。今日のために新調したのだ。

「大丈夫だね？薫も浴衣着るっていつてたし。」

P I P I P I P I P I P I

突然携帯の着信音がして真木は机の上においてあった携帯をあわてて開いた。

「もしもし〜？」

『もしもし真木？あのさ！！今日、良と水城くんも一緒に行くことになったけどいい？』

「良？」

私は普段聞かない名前に首をかしげた。

『ああ・・・田戸枝よ。』

「田戸枝くんか！！いいけどいきなりどうしたの??」

『それについては後で話すわ』

「んゝいいよ別に・・・でも薫。浴衣着る?？」

『着るよ!! 当ったり前じゃん!!』

「ん! わかった。それじゃあ後でね。」

電話を切ると真木は準備に取り掛かった。
現在14時。待ち合わせ15時。

「ごめん。待った?？」

家の下でいつもの通り待っていた薫に謝る。

「いや? いつもよりは早かったね。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8077h/>

月の晩に

2010年10月9日22時25分発行